



日本記者クラブ 研究会
「総選挙後の日本」①

鳩山政権、成功のカギは？

— 細川・非自民連立政権の教訓 —

田中 秀征

福山大学客員教授

2009年9月2日

元さきがけの田中秀征氏が、民主党圧勝による政権交代について細川政権の時との比較論を展開した。田中氏はその中で「どちらの政権でも突出した指導者として存在したのが小沢一郎氏」としたうえで、「ゼロから種をまいてチルドレンを育てた」小沢氏は戦後最強の政治力を獲得した、とし、小沢氏が自重して鳩山氏をもり立てることができれば、大久保利通以上の歴史的事業が可能になる、と期待を語った。一方で、自民党については「再生しないでしょう」と切り捨てた。

山口敏夫さんからの電話

皆さん、こんにちは。久しぶりでお招きをいただきまして、きょうは、新しく発足する鳩山民主党内閣、そして私には、特に93年の細川政権の経験と比べて、今回の政権がどういう性格のものであって、どういう方向に進むのか、そういうことについて話をせよ、ということでございました。

たまたま雑誌の「エコノミスト」にその辺のところを書いてありますので、資料として配布していただきました。ご承知のように、自由民主党が保守合同によって結成されたのは昭和30年、1955年の11月15日でありまして、それ以来、自民党が下野した、政権の座をおりたということは、93年の細川連立政権による非常に短い時期だけでありまして、本格的におりた——本格的におりたなどという言葉があるかどうか知らないけれども——という感じがするんですけれども、今回、当時との最大の共通点はそれです。

共通点というのは意外と少なく、もう一つ大事な共通点があります。それは、どちらもその政権の政治基盤で突出した指導者として存在したのが小沢一郎という同一人物であるという共通点です。これ以外の共通点をいえても、私にはいえないくらい共通点というのは少なく、むしろ相違点ばかりが私には目につくのです。

まず相違点の筆頭に挙げられるのは、細川政権というのは目指してできたものではないということです。したがって、準備がゼロだった。細川さんも、政権をとるということを考えていたわけではありません。私どももそうで、私が10人の同志と93年に自民党を離党したときは、少なくとも10年間は政権参加しない、どうせこの政治の流れというのはいつか終わるときが来るので、そのときのためにきちっとした優秀な人材を集めて、その流れにとってかわる、そういう中核の政治集団を鍛えあげていこう。そういう趣旨でございましたから、我々もまた政権をとるなんて、考えてもみなかった。

ただ、いま思えば、自民党を飛び出して、長野の選挙区に帰っているときに、山口敏夫さんから私のところに電話が来て、選挙が終わったら細川政権だということです。私、びっくりしちゃって、そのためには小沢さんと2人でホテルで徹夜で話してくれ、そういう電話だったので。小沢さんというのは、自民党内で全く私と対極にいる人だというふうに思っていましたし、小沢さんはもちろん名前すら知らないくらい、小沢さんからみれば影の薄い存在だったのではないかと思うのですが、山口さんは、とにかく徹底して徹夜で話してもらいたい、ということでした。まあ、山口さんらしい尾ひれがつくんですけれども、ルームサービスとか、そういうのはみんな廊下で待っていて、おれがやる、そういうことをいいました。

後で考えますと、なぜあの人がそういったのか。一流の勘といいますか、非常に勘の鋭い人ですから、この間、細川さんにその話をちょこっとしたら、「へええ」といっていました。当然、私のほうでは、大体政治的な駆け引きとかいろいろなことをして、この人にかなうわけないから、近づかないほうが良いというふうに思っていたくらいですから、もう全然取り合わなかったんです。しかし、結果的にはそういう展開になってきたわけですから、そのくらい政権なんていうことは考えてもみなかった。ところが、それによって準備が全くゼロだったわけです。細川さんももちろんだし、私どもも政権をとるなんていう準備は全くなかった。

今回は、長い間、政権交代を目指してきて、それなりの準備を整えてきた。そういうのと全く違うのです。もちろん鳩山由紀夫さんにとっては、総理大臣になるんだ、そういう気持ちで自分を鍛えてきたはずですから、あの当時と全然違う。しかし、裏返してみると、政治の側に政権をとる用意がないということは、逆にいうと、霞が関にも細川政権に対するその用意がなかったということです。私からみると、脳震盪を起こしているという感じだったですね、細川政権ができたときは、むしろ自民側が少数政党を集めて政権を維持する、そういう前提で霞が関はいたのではないかと私は思います。です

から、非常に意外な展開だったということがいえると思います。

この指とまれと発想転換

ご承知のように、当時、あんな見事な構図というのはないと思うのですが、自民と非自民というのがほぼ同じで、我々さきがけと日本新党が50人ほどだったのですけれども、その50人が入ったほうが与党になる。そういう衆議院の構成になってしまったわけです。違う言葉でいうと、我々には野党になる道が与えられなかったのです。運命的なことだと思います。野党でいたいと思いながら、我々が入ったほうが与党になるわけですから、だから我々には野党の道がなかったという非常に皮肉な結果になって、もう毎朝、私と細川さんと武村さんと3人で、朝7時に協議を重ねて、本当に困り果てて、「どうするんだ」と。そういうことになりました。

当時、私は夜中に夢をみて、うなされて起きたことがあるんです。自民という鬼と非自民という鬼に部屋の隅に追い詰められて、どうしようもなくなって悲鳴をあげて目をあいてしまっただけ。そのときに、はたと思いついたのは、こちらから第三の指を出す。自民と非自民が「こっちへ来い、こっちへ来い」といっているほかに第三の道があるんだ、ということに気づくんです。いまとなると当然のことなのですが、こちらから指を出して、「この指とまれ」という方法があるということに私は気づきました。

これは、河野さんが引退されたから、僕は話したことないことなのですが、「政治改革政権」を提唱して、非自民政権ができる。そういう状態に流れがなったときに、宮沢先生から電話が来まして、河野さんに会ってくれという話が来しました。都内のホテルで河野さんに会いました。ついてこられたのは津島さんだったんですけれども、何とか我々も入れてくれ、実はこういう話だった——引退されたから話してもいいと思うんですけれども——それを受け入れると挙国内閣になってしまったのです。だけど、

我々が政治改革政権の提唱で出した条件を完全にのむかどうか、あいまいであったために、やっぱりそういう事態になって……。

要するに、非自民側と自民党の両方に出したわけです。提示して呼びかけをしたわけです。呼びかけですから、自民党を排除したわけではないのです。ただ、自民党がなるべくそのハードルを越えないような、自民党にとっては厳しいハードルをつくったということはあるのですけれどもね。そういうことも実はあったのですが、いずれにしても、できた後は、非常に準備不足だったということです。

もう一つ顕著な違いは、当時は、8党会派なのです。政権与党というのは、8党会派。今回は民主党一党ですから、8党会派の寄り合い所帯で、つい直前まで対立していた自民党の離党組と社会党の左派まで合わせた形の、要するに思想基盤や政治基盤が全く水と油の人たちが反自民という感情だけでまとまった。これを小沢さんは、8つのうち6つを囲い込んでいたのです。選挙中から恐らくそういう動きをされていたのだと思いますけれども、残ったのはさきがけと日本新党で、統一会派を組んだのですけれども、6党会派を非自民勢力として囲い込んでいた。

で、連日やっている協議の最中に、細川さんに対して小沢さんのほうから、細川政権の話がもたらされるわけです。もたらされて、私もそうだし、武村さん、鳩山さん、みんな猛反対。私は特に猛反対で、随分細川さんに対してひどいことをいったなという思いがあるんですけれども、「絶対にだめだ。我々はこれから、日本の政治が本当にだめになった場合に、きちっとした受け皿をつくっていく。そういうことだから、絶対だめだ。準備も何もないし、とてもそんなことはできない。一番の理由は、基盤となっている8党会派が問題だ」と。

それで、先ほどいった、こちらから指を出すという事態に追い込まれていくのです。そういう選択肢がないということに気がついてから、与党になる以外ないということ。

それで、そのときに一番問題だったのは、8

党会派は、自民党政権を続けたくないという気持ちで共通していたけれども、それ以上でもそれ以下でもなかったということです。非自民、反自民でまとまっていた。私が細川さんにいったのは、非自民政権というのは成立した途端に目標を失う。非自民政権をつくるまでは求心力があるけれども、組閣を終えた時点で、自民党を追放するという目標を達成するから、それ以後、8党会派はばらばらになる。ずなる。だから反対だと。そういう反対なんです。

特命政権という論理付け

結局、思案に暮れて、特命政権という論理を踏み出して、普通の佐藤栄作政権とか、ああいいう通常政権、すべての問題に対処していく思想基盤も政治基盤もきちっと固まっている、そういう政権ではなくて、特別の使命を課せられた政権をつくる以外にないといつて、当時、私も細川さんも、どっちかという政治改革、小選挙区導入の流れに対していら立ちを持っていました。

それは、東西冷戦が終わって、もう一つは右肩上がりの経済が約束されない事態になったときに、何やっているんだと、後で船田さんが「熱病だった」といったんですけども、本当に土石流みたいな流れになっていて、海部内閣をつぶし、宮沢内閣をつぶした。これを期限付きでやって、さっさと店じまいする。そういう政権をつくる、というところに着想が行ったのです。で、政治改革政権、年内にという期限をつけて、それで呼びかけをしたわけです。それで、250、250という政府案をつくる。そういう形になっていたわけです。

いずれにしても、8党会派と、今回は1党だ。1党であれば、当然、いま申しあげたことといえば、通常政権が可能であるということになりますね。ですから、一つの課題で仕事をしたら終わりにすればいいという政権ではなくて、もっと幅広く、将来の日本を見据えたうえで政権運営ができる、という点がやっぱり違っているというふうに思います。

ほかにいろいろ違いはあるんですが、もう一つは、細川政権に参加した人たちは、突然できたものですから、共通したマニフェストを提示していなかった。各党がそれぞればらばらに思い思いの政権公約をして選挙をやって乗り切ってきたということで、共通の政権公約はそこに何もなかった。これも重大な違いです。今回は、民主党はきちとした政権構想を打ち出して、それで信を問うたということですから、これもそうです。

それからもう一つ、大事なことをつけ加えるとなると、これも細川さんとよく話すんですけども、政治不信が背景にあったという点では、93年も今回も同じです。ところが、93年の場合は、政治不信は主として政治腐敗から出てきた。いろんな汚職事件が続きましたから。今回は、安倍さん、福田さん、麻生さんもそうですが、一人一人、汚職、スキャンダル云々という話ではない。もっと深刻な、劣化現象ではないかという……。象徴的なのは年金問題だと思うんですけども、政治と行政の仕組み、統治構造の劣化。

だから、当時の政治不信と相当質的な違いをみることができると私は思います。それは、政治不信が腐敗から来ていれば、新しいもの、若いもの、清潔なものを求める。それで日本新党がバーッと出てきた。それで済む。劣化の場合は、総体的に明確な政策姿勢を示さなければだめだということになってきますね。だから、それも相当背景として大きな違い。

もう一つ加えますと、首相の個人人気です。特に、首相と政権基盤との力関係です。8党会派といえども、それが何となくうまくまとまって、当初、歩いてきたのは、細川さんに対する世論の圧倒的な支持、細川人気が強かった。ある意味では、8党会派は、それに対して面と向かって大きな批判ができない。

これからの鳩山さんの政権運営にとって、非常に重要な要素で、今回は、共同通信の世論調査でしょうか、きのうかおととい、私、みましたけれども、だれが党首かということが決め手にならなかった、というのが6割を超している。

党のほうが首班候補の存在感より大きいのです。全然違うでしょう。小泉さんの場合は、小泉さんという個人の存在感が自民党をはるかに上回っていた。だから、自民党に対してかなりのことができた。細川さんの場合にもそういうことがいえると思います。そこがやっぱり大きな違いなので、これはきちっと鳩山さんは認識されていたほうがいい。

民主の手借りて自民倒した

今度、民主党が勝った背景には、一つは、最も大きな問題は、有権者は民主党の手をかりて自民党を倒した、そういうことでしょう。プラス、もちろん民主党に対する積極支持があるわけですが、民主党が積極支持を得られるだろうと思っていた、ばらまき政策とも受け取る向きがある直接給付の案件について、これまた調査をすると、非常に支持が低い。やっぱり主力になったのは、自民党を追放したい。

これは、麻生さん個人に対する不信感が募っていたこともあるんですけども、それだけではないんですね。麻生さんを選んだのは自民党じゃないか、という自民党全体に対する不信感。それから、首相の支持が落ちても入れかえることさえできない自民党。

昭和39年の池田、佐藤のバトンタッチは、東京オリンピックを花道にして池田さんが引退されたときに、最大の政敵に結果としてバトンを渡した。

それから、田中角栄首相の退陣に伴って、最も端っこのほう、対極にいた三木さんに政権を渡した。土壇場にいくと、政治全体、党全体、国全体のことを考えて対応するという自民党のたくましさを、そういうものも失ったということですね。だめになっても入れかえることができない。やめないほうもやめないほうなんです。入れかえることもできないほうも……。そこに、これは麻生さん本人に対してではない。自民党構造全体が劣化したということ。この不信感は大きいですね。それで民主党が勝った。とにかく追放するほうが先だ、こういう形での

流れであったと思います、主力はね。私はそういうふうにいる。

プラス、民主党内の有力なリーダーの人たち、小沢さん、菅さん、岡田さん、こういう人たちの個人人気を加算されているんですね。トータルされて出てきている。自民党と比べればはるかに期待できるリーダーの人たちですから、そういう人たちの、ある意味での集団指導に対する期待ということですね。突出した指導者ではないですよ。人気に関してはガリバーはいないと私は思っているんですけども、だから、それが細川政権とうんと大きな違いがあるというふうにいる。

大体そういうところが、私からみていて、当時と今回の大きな違いなんです。一番問題点といえば、共通点の中にあるんですけども、小沢さんが中心人物であるということ。小沢さんは、今回、鳩山さんを盛り立てていくという、そういう姿勢を貫いていくとすれば、恐らく小沢さんが尊敬しているといわれる大久保利通を上回る歴史的事業が可能だと私は思っているんです。小沢一郎さん自身が歴史に評価される、そういうふうにいるし、鳩山さんは、祖父である鳩山一郎総理を超える業績を上げることも可能な、そういう時点にいま立っている、というふうにいる……。そうなるかならないか、ということなんですけども、どうですかね、皆さん、専門に政治を常にみてこられて。

小沢氏に戦後最強の政治力

私は、戦後史で、いま、このときの小沢一郎さんを上回る政治力を持った人はいないとみているんです。それは、例えば佐藤栄作総理も当時、非常に強い力を持っていた。その後は田中角栄総理もそういう立場にあったことはあるけれども、はるかにそれを上回る政治力を手にした、と私は思っています。ですから、これを有効に活用していくことになれば、本当に歴史的な業績を上げることができると思いますね。

田中角栄首相も佐藤栄作首相もそうですが、みずから種をまいて育てあげた子飼いの人というのは、だんだん政治経歴が増すたびにそういう人たちは多くなってくるんですけども、必ずしも多くない。小沢さんも当初、自民党から離党して、新生党をつくったり、新進党で頑張ったりしたころの一緒にいた人たちは、必ずしも子飼いではないですよ。小沢さんに共鳴して行動した。子飼いでない人は去ることも自由、文句いうことも自由、離れていった人たちもいます。小沢さんは、それから一つ学んだのではないですか。最後までついてきてくれるのは、ゼロから種をまいて育てなければだめなんだと。そういう意味では、こんなに大量の自分の共鳴者を集めた人はいないですよ、戦後。小沢さんのおかげで政治の世界に出られた。

例えば、田中角栄首相についていった人たちでも、相当部分——田中角栄首相というのは、みずから種をまいた形をしたのは昭和44年の選挙からですよ。47年に総裁選で出ていますから、ほとんどの人が子飼いではないです。佐藤総理の世話になった人とか、あるいは吉田茂総理の世話になった人とか、そういう人たちの集まり。

まあ、思いどおりですね。思いどおりの行動のできる、しかも戦後最強の勢力を持ったということなんですけれども、細川政権当時の8党会派なんか、ほとんどいないです。子飼いである人なんかいないわけですから、当時と比べたら、全然リーダーシップは違います。

この小沢さんについて、細川政権当時のことを学んでほしいと思う。細川さんは今回、新聞のインタビューに応じました。その真意は、私なりに理解すると、あのときの間違いを、新しい政権は繰り返してほしくない。こういう思いだと私は推察しているんです。

霞が関と一体で攻めてきた

それはどういうことかと簡単にいうと、霞が関と政権基盤が一体となるという形で首相を追い詰める、この事態です。これは国民福祉税

の一件が象徴的であるわけですがけれども、細川さんは、当時の増税論議、減税論議の中で、大蔵省側の間接税税率アップ——国民福祉税といますけれども、名前を変えただけの話で——それに対して最大限の抵抗をしました。これは表にはあらわれなかったと思うんですけども。

これも細川さん、この間のインタビューで話したので申しあげますけれども、最大の助言者は宮沢喜一首相だったです。陰で何度も何度も会いました、3人で。91年の年明けにバブルがはじけて、そのときの景気の谷底は93年の10月だったんです。これは細川内閣だった。細川さんも私も、それから宮沢先生もそうですが、景気が順調な回復軌道に乗る、だれがみても順調な回復軌道に乗ったということと、行政の冗費、無駄遣いを——特に細川さんはそういう思いが強かったんですが、納税者が納得するほど、行政経費の節減をやる。この2つの前提、景気の問題と行政改革、そうでなかったら、税率アップには応じない。しかも、増減税一体論議を、所得税減税ですするという方向でしたから、そのときに、減税の食い逃げをされるということになったらいけないということで、いつ上げると税率アップの構想だけしておく。それが当時の大蔵省の考え方であったんですが、そのマイナスの心理効果というものについて、宮沢先生は特にそうだったです。水をかけるような話、そんな事態ではないと、すごかったですね、思い出すと。あの宮沢さんの顔つきというのは。

私は、一般論からいうと、財政家が経済運営をするのはよくないと思っているんです。財政家が経済と金融の政策決定に主導権をとるのは、もちろん意見をいったりするのはいいが、主導するのはよくない。その流れの中で、財政と金融の分離ということが出てきたと思うんですけども、財政家のみる経済というのは断面なんですね。ハムみたいな断面なんです。経済というのは生き物ですから、財政家が税収確保のことを一生懸命考えたり、すきあらば増税と……。すきあらば歳出削減と考えていてもらわなければ困るから、それはそれで全うして

くれればいい。しかし、その財政家の目で経済運営するということには、私は反対。当時からそういう考えでありました。

ですから、そういう流れで来たんですけども、細川さん、必死になって抵抗して、私は当初の約束どおり、政治改革関連法案が上がった1月末にやめました。そのときに、これは細川さんも打ち明けていることだからいいのですが、私は、あなたもやめたほうがいい。たった一つ、政治改革法案を上げるという特命でやってきたことだから、あしたから求心力は一切なくなって、遠心力が働く。1月末には80%ぐらいの支持率が出ました。この拍手は、よくやったという拍手であって、これから頑張れという拍手じゃない。それをきちっとみきわめたほうがいいということ、失礼ながら、やめるときに申しあげたんです。

国民福祉税騒動の経緯

結果的に、おけのたがが外れるという形の状態のところへ、今度のインタビューで細川さんは、大蔵省が高い支持率を利用して税率をアップしよう、そういうところがうかがえたということ、をちらっといっています。私も、ある幹部が話しているのが耳に入ってきた。80%の支持率だって、税率アップは不人気だから、20%は下がる。20%下がっても、60%残るから、田中角栄内閣並みの高支持率だと。予算査定みたいにいかないんですよ、支持率は。下がるときは、一瞬にして0になる。そんな算数の計算どおりにはいかないわけ。

結局、支持率が上がった、その流れの中でそういう方向を打ち出そうとしたんでしょうね。私がやめて3日後に、国民福祉税、夜中の会見。この席には武村さんも立ち会わなかった。これも問題になった。鳩山さんは出席された。数時間前に与党代表者会議が突きつけたわけです。これも今度お話ししました。恥ですよ。総理が動かされているみたいで恥なのですが、恥を忍んで、こういう事態がないようにということで、細川さんは打ち明けたのだというふうに思

うのですが。非常に皮肉なことですが、私は翌朝のさきがけ、日本新党の統一会派の会合で議論にもしない。要するに、その国民福祉税構想を先頭立ってつぶすという役割を果たさざるを得なかったわけです。つらかったです。つらかったけど、細川さんの本意はそうじゃないんだという気持ちが私にはよくよくわかっていただけだから、そういう行動に出てもいいかと……。

問題は、与党代表者会議と霞が関が一体となって攻めてきた。最近ちらちらと報道されていますが、あのときは特に、大蔵省、通産省、外務省一体という非常に強力なトライアングルをつくって、官邸のほうを押しても、なかなかうるさいのがいるというので、党のほうをどんどん押していたんでしょね。その一体でそうやって攻めてきたという形で、国民福祉税構想は、小沢一郎さんが主催する与党代表者会議が細川さんに迫った。数時間前に。

ところが、当時は、皆さん思い出すことができると思うんですが、先ほど申しあげたような景気の状態に加えて、日米経済摩擦があって、2月10日、その消費税の会見から1週間後にクリントン大統領との日米首脳会談が設定されていて、農業不作で、米の輸入なんていう事態も起きました。ウルグアイラウンドの交渉もありました。すさまじいばかりの、特命政権で、一つだけ片づければいいのかという政権に対して、ほかの通常政権でも対応が難しいような難題が山のように降りかかってきて、なおかつ、これも最も重要だといっているんですが、翌年度予算が、年明けになって、2月にもなるのに編成されていなかった。その前に補正予算を出す、そういうアナウンスもされたにもかかわらず、補正予算にも手がつかなかった。身動きがとれない事態。

これも細川さん、どこかで話していますが、私は「やめろ」といった。「そういうわけにいかないということ、秀征さんだってわかるじゃないの」という言葉が返ってきた。そのくらい身動きとれない状況の中で、福祉税構想を発表しなければならないということになって、それ以後は、もう本当に奈落に落ちるような形で遠

心力が働かない形で、期待に沿えないという結果になっていった。

やっぱり小沢さんは、しっかりこの事実からもう一度学んで、とにかく鳩山首相の方針を最大限尊重するという姿勢で行っていただきたい。そうしたら、先ほど申しあげたように、この時代に、大久保利通を上回るような大きな成果を上げてくるだろうというふうに思います。

それについては、やはり政権体制というものが私の関心事でもあって、きちっとした政権体制、マニフェストの実現を担保できる、そういう政権体制を築いていく。今度の移行チームをつくるというの、なるほど、そのほうがいいかもしれないと思ったら、すぐやめになっちゃったので、それはどうしてやめになったか、私にはわからないんですけども、構想は練っているでしょうね。ほとんどの中核は決まっているというふうに思いますけれども。

人事権で譲るな

ここにも見出しになっているんですけども、菅直人官房長官というのは譲れないところだというふうに思っているんですね。本気で政治主導の体制を築きあげるとしたら、ある種の体験者ですからね、厚生省の一件でやり合っ。政策上のせめぎ合いをやった人を“体験者”と私はいうわけですが、ただ何度も大臣をやったとか、あるいは官房長官をやったとか、副長官をやった、それはせめぎ合いの経験がなかったりすれば、これは体験にならないから、だから、菅さんを……。

ただ、官邸についての体験をしていないです、彼は。だから、私、たしかここに書いたと思うんですけども、官邸の実情、政策決定の実情を、私からみて、よく知っている人を挙げろといったら、中川秀直、江田憲司というぐらいしか挙げられないですよ。本当にそのすさまじさを知っている人というと。

だから、党外でもいいから活用して、そのぐらいの気持ちでやるということじゃないですか。ほかから人材を起用するなんていうことは、

オバマさんだっていくらでもやっていることなのでね。そのくらい重大局面だと私は思いますね。体験した人がやらなきゃいけない。

私は、一番の重大問題というのは、新聞にも書きましたけれども、総理周辺をどうするかという問題と、人事権の問題。ですから、今回の消費者庁の一件については、よくやっているかと拍手です。こういう形でやっていってもらいたい。そうすると、問題点が明らかになってくるんですね。どういう形で消費者庁長官の人事、あるいは委員の人事が行われているかということが、うんと公開されるじゃないかですか。一般国民からみたら、驚くべき実態ですよ。考えてもみない。そういうものが明らかになっていく。

だから、僕は今回の一件というものは、鳩山さんたちに拍手を送りたいというふうに思っているんですが、あとは総理周辺の問題ですね。そこをまともな人、割に常識人ですから、まともじゃない人を何人か入れたほうがいいですね。いますよね、今度、民主党から当選して、民主党の外にいるような人たちもいるし、ちょっと何というか、非常識とはいわないまでも、“異能の人”というか、そういう人。もう皆さん頭に浮かぶと思うんですけども、そういう人たちに補佐官をやってもらおうとか、そういう形ですかね。そこでいろいろなせめぎ合いがあって、ごたごたがあったりいろいろすると思うんですが、問題点が明らかになってきますから。そういうほうが私はいいというふうに思いますね。

小沢、小泉の共通点と相違

小沢さんについては、私が政治家の中で、地位に対して、この人全く無欲だなということを経うと昔から痛感してきたのは、2人とも全然仲がよくないけれども、小泉さんと小沢さんですね。地位に対して、本当に恬淡としているんです。小泉さんは、地位に対して無欲だということが武器になっていますよね。だから、大勝負ができるんだというふうに、私、思うんで

すけれども、小沢さんも全く同じです。

ただ、小泉さんは、いわゆる権力に対しても恬淡としているんですけども、小沢さんはそうではないですよ。実権というものに対する貪欲さがあるから、地位に対しては……。悪いとはいわないけれども、おそらく、例えば代表と総理の分離論みたいなのには乗らないですよ。代表になったらテレビに出なきゃいけないし、いろんな表向きの顔にならなきゃいけないということがある。それは乗らないし、それから、重要閣僚といたって全く興味ないですね。総理にだって、どっかかといったらなりたくない人ですから。

だから、そういう地位に対して、特に政府のどこかに座れという話には、あの人が応じるはずないですから、党に残る、残り方の問題ですね。残り方の問題で、大変ですね、これは。何とかしようといったって、何とかできる人、いないものね。だから、自重していただくほかはない。おそらく、今回、最後だと……。93年は別にそうじゃないですからね。本格的な政権交代という意味では、歴史的な成果をおさめようという気持ちでふるえているというふうに、私は思っているんですけども。

まあ、党と政府とが対立していくような、首相と小沢さんが対立していくというような状況にはならないと思う。基本的に2人は合うんですよ、人間関係で。非常にウマが合う関係ですね。まあ鳩山さんからみれば、小沢さんは自分が持っていないものを持っているという尊敬心がある。前からみまして、さきがけ時代、対極にいたころから、小沢さんに対する評価というのはよかったですよね。小沢さんはもう、鳩山さん大好き、とっていいぐらい鳩山さんを好きですよ。

そういうところはいいんですが、ただ、注意しなきゃいけない。政治家としての成り立ちなんですけれども、鳩山さんは、どちらかという世論をみている政治家ですよ。政治基盤としての世論をみている。浮動層といってもいいですよ。そういう点では小泉さんと似通ったところがあるんですけども、小沢さんは固定的

なものをみていますね。政治基盤としての組織や団体、固定的なものをみている。それから、鳩山さんは浮動的なものをみている。当然、そういう立脚点が違うと、いろんな意味で政治判断、政策判断にずれが生ずるんじゃないか。

鳩山、小沢の相性悪くない

同じような見方をしている人たちというのは、同じ判断にたどり着くんですけども、政治家としての関心が、(鳩山さんは)常に世論をみている人ですよ。世論の拍手を気にするといってもいいんですけどもね。小沢さんはそういうことを気にしないですから。力ですから、具体的なパワーですから、あの組織をどうする、あの団体をどうするという形でね。だから、今回の総選挙でも、おそらく小沢戦略が成功した部分があるということからみれば、自民党を支える組織を弱体化する役割を果たしたんでしょうね、小沢戦略というのは。自民党を支えている柱を1本とってしまうとか、1本くぎを抜いてしまうとか。そういう形で、自民党を支えている非常に固定的な基盤を弱体化させるということが結果的に民主党を強くした、相対的に強くしたという見方で私はみているんですが、それほど具体的な政治基盤に目が行く人、関心を持つ人ですよ、小沢さんは。だから、その政治基盤に対する関心度の大きな違いが、政策判断や政治判断の違いに出てくるということは考えられますね。

だから、具体的にいうと、小沢さんの的に物を考えて、そういう自民党の基盤がこっちに寄ってくるという話になると、例えば、景気対策を含めて、財政出動に対しては、間接的な給付というものがより多くなるという感じがします。組織を通して、融資とか補助金とか、そういう手法ですね。それから、世論直接という、対象が個人で、個人の所得増、支出減というのを、かなり直接的にもたらされるような手法、これ、程度問題ですよ。こっちを選ぶ、あっちを選ぶというのではない。より政策的な関心が行くだろうということをいっているわけです。自民党

的な手法といってもいいのですが。

だから、時代にふさわしいような組織や団体が生まれてきて、それに例えば、補助金や融資の活動をしていくというのは効果的なんですけれども、もう立ちおくれていて、どうしても経済活性化のためには、残念ながら、ここにもう一度息を吹き返すためにそんなにお金を使うのは無駄だ、というようなところにテコ入れしていくという、そういうことには小沢さんだってもちろんならないでしょうけれども、とにかく組織、団体というものを個人よりも、鳩山さんよりも多少重くみていくのではないかと、いうふうに私はみているのです。これ、重要な違いです。

そういうさまざまな政策的なずれが、2人の関係をどうするかということになってくるのですが、あの2人の関係は、例えば、その辺の中小企業で出会ったといっても仲よくなりますよ。隣の家に住んでいたといっても仲よくなる。同級生だったといっても、同じクラスにいても仲がよくなるという、そういう関係だと私は思っているからね。変に個人関係でだめになるということではないですね。何か求めるものも、小沢さんというのは、晴れがましい舞台がほんと嫌いですよ。鳩山さんは晴れがましい舞台が何より好きですよ。 (笑) 相当違うんですよ、これ。いや、おれがそこに立つんだという話にならないから。「あんた立つ、ああ、それはよかった」——そういう話になってくるんだ。これも、政治家個人のつき合いの中では大事な要素だというふうに、私は思いますね。

中長期の成長戦略を

あと、一番心配したのは、麻生さんも民主党に対して、成長戦略がないということをお願いしたけれども、私もそういう懸念を持っていました。どちらかというと、稼ぐことよりも使うこと、配ることに重きを置かれた政策姿勢だったなという感じがするのです。ですから、少子高齢化、人口減、あるいは非常に大きな借金を背負っているということも含めて、中長期の展

望というものを練りあげていくというのが課題ですね。

私は企画庁にいたということもあって、直ちに経済計画を策定する作業に入って、マニフェストの重要部分を盛り込んだ形で5カ年計画を策定する。それこそ、専門家、有識者を集めて練りあげていって、これが民主党の政治戦略であるという……5カ年計画ぐらいできちっと中長期の日本経済の展望。それをきちっと提示するということが、やっぱりいろんな意味でのばらまきといわれるようなことをやらなくて済むことですよね。中長期で成長基盤、生活基盤が構築されていくという信頼感が生まれれば、今晚もつといっぱい食べようという話ではなくなってくるんですよ。

ですから、いろんな世論調査をみると、有権者、納税者の側にそういう用意があるわけですから、ここは、こういう展望で国の経済をやっていくんだと、国際社会でこういう位置づけになっていけばいい、そういうようなことを展望したものを、直ちに、直ちに取らかったほうがいいと僕は思いますね。その意欲を示すためにも、非常に成果の大きいものになるし、それから、希望の持てるものになりますね。

政権交代したとほっとしているところで、何やるんだといったら、あれもしてくれる、これもしてくれるという、いわゆる財源問題に絡むような話ばかりになってきてしまうと、大きく前に進まないですから。ですから、きちっとそういう展望を示す。まあマニフェストの枢要部分、経済、あるいは経済社会部分、それから年金、医療、介護なんかも含めた形での経済計画をつくってもらいたいなということを申しあげて、一応、私の話は締めくくらせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

質疑応答

司会・倉重篤郎企画委員(毎日新聞論説副委員長) 非常に興味深いお話でありました。皆さん、いろいろ質問あるでしょうから、これを

受けますが、私から2つだけ、まずお聞きしておきます。

小沢一郎さんの力が果たして、ほんとにどこまで強くなるのかということに対して、いま、非常に説得力のある回答をいただいたのですが、ただ、田中角栄さんの時代の、閣将軍的なパワーというのは、あれは中選挙区制度のもとで通用した力じゃないかと思っているんです。けれども、それから小選挙区になって、与党の代表にあらゆる権力、公認権も含め、お金の絡む権力が集中しているということと、それから小泉さんのときに行った官邸機能強化で、総理大臣に力が集まっていることを考えたときに、果たして小沢さんの力が、かつての田中さんほどの力が出てくるのかどうかというのは一つ疑問なんです、それはいかがでしょうか。

日本は特異な官僚集団

田中 小選挙区制はもう関係ないんですよ、議員構成ができちゃったから、この4年間は。だから、小選挙区で出てきたか、中選挙区で出てきたかというのは、少なくともこの4年間は関係ない。出てきちゃったから。その後まで続くかという話になるとまた違いますが、総選挙があったら、という話とは場合が違うのですね。

それから、官邸機能が強化されたとは全く思っていないです、僕は。やはり重大問題は人事権で、日本の制度というのは、これはもう外国の方もいらっしゃるけれども、僕はどう考えても、この日本のような統治制度というのは歴史上も知らないし、諸外国にも例をみないんですけども、人事権を持たない政治というのは、これは選手交代できない監督と同じなんですよね。全く求心力が生まれません。

だって、あの田中眞紀子さんが大暴れして、課長一人かえられなかったですよ。それから、小池百合子さんは、事務次官の更迭に口を出して、結果がそう出たかもしれないけれども、自分があと続投することはもちろん論外だった。それほどのことなんですよね。だから、やっぱりあまりにも異例ですね。特異な例。

要するに、独自の政治的意志を持っている官僚集団というのは、日本以外に…。私が尊敬している石橋湛山元首相は、大正13年に「行政改革の根本主義」という論文を書いて、そこに、日本の官僚制度の特異性について、世界に類例ないけれども、もしあえて挙げるとすれば、労農露国だと。あれはレーニンのロシア革命が起きた直後ぐらいのころの論文なんだけれども、労農露国。要するにソビエトロシアぐらいだと。要するに、政治勢力が官僚として定着している。これは藩閥政府の流れからずうっとたどらなければいけない。独立した政治的意志を持って動くという、こういう官僚制度というのは他国に例をみないですよ。それで、政策の継続性というのを錦の御旗にして、政権交代してさえもその自分たちの意向を押しつけてくるという、こんな国はないですよ。そこが一番。

なぜそうかといったら、戦後は特にそうなんですけれども、人事権がないというところですね。だから、事務次官会議なんか廃止しなくたっていいですよ。事務次官会議にかける重要案件を政治が仕切る。仕分けることができれば、あと専門的、技術的なことについては事務次官会議で検討してもらおうほうがむしろ効率的だというふうに思うから、制度の問題ではない。行政刷新会議をつくる。閣僚委員会をつくる。

それからもう一つ、戦略何とかというのがあったね。それを私は、一概に否定はしないけれども、それは私にいわせると、人事権のない社長室を拡充するだけです。そうすると、行政の複雑化、肥大化を招くという、それだけに終わる可能性があるんですよ。いまの制度のままでもかなり強力な政治機能を発揮することができるので、それはもう着々と足りないところを補充して補っていくということでもいいと思うんです。すぐに臨時国会を開いて、こうする、ああするといったって、そこに主導的に官僚が関与していく……。

昭和30年代の原子力委員会というのは、重要問題になると事務局が出ていったですよ。経済財政諮問会議は、重要問題になるほど多くなるんです、周りが。それほど政治家とともに官僚も劣化しているんですよ。劣化してい

る。だから、そういう事実を考えていかなければいけないと思うのです。

だから、宮沢さんが、細川さんの引き継ぎをやったときに、「これは役所の人たちは知らないことだから」と、何度もそういう言葉が出ました。役所の人たちが知らないことを持っている総理なんてほかにいなかったですよ。だから、総理の引き継ぎは必要なかったということですよね。それで、宮沢さんはそうだからこそ、私がみる限り、やっぱり官僚組織というのは、陰で悪口いっても、宮沢さんに畏敬の念を持っていましたよ。だって、生きた外交史で、生きた経済史ですからね。それで、ここに戦後の統計を持っていて、例えば、失業率統計というのは、昭和28年から始まっているんだけど、主なもの、みんな覚えているんですよ。こちら側に「日本国憲法」入れているんですよ。もうくしゃくしゃになるような。そういう政治家が、終わってバッチとって、そういう生活態度が変わらない。これは政治機能の強化の流れの中で、やっぱり踏み出し過ぎた官僚組織ね。官僚いじめとか、官僚退治という俗論が最近はびこっているけれども、そうじゃない。民がいじめられてきているんですよ。いじめをやめろ、そういう話なんだ。官僚なんかいじめられてないですよ、全然。

政治の場に最高の見識を

だから、分を越えたところを元に戻ってもらおう。本領発揮してもらおう。昭和30年代、20年代当時に戻ってもらおう。そのかわり、分を越えるということになると、当然政治の役割が求められるので、やっぱり最高の見識が政治の場に供給されるような、そういうことは当然要請されてきますよね。任したらとんでもないことになったという話では、これ、どうしようもないので、もっともっと人材の供給ルートといいますか、復職ルールみたいなものをつくって、落ちたら会社にまた戻れる、先生が立候補して政治をやめたら、また教壇に戻れるというような復職ルールを確立していくというのもやっ

て、いまの供給源というものを広くしていく必要がありますよね。

やっぱり、同じ議員会館の部屋を親子で使っていくと、茶飲み茶碗まで同じだと。おかしいですよ、こういうのは。たまたまそういう家に生まれたから政治をやるんだと。豆腐屋の跡継ぎじゃないんだから。そういうのはやっぱりいちゃいけないというわけにはいかないけれども、そういうトータルなことが、こういう事態を招いたということですよ。

だから、非常に活性化する、特に見識というものを“野に遺賢なからしむ”という言葉ありますよね。要するに、在野に残されている見識はないという、要するにそういうものを動員できるような政治といいますか、この機会に見識のある人、企業人、言論人、学者、そういう人たちが、毎朝、駅で演説するというような、そんな異常なことはしない。犬も聞いてないようなところで毎日話している人は異常ですよ、私にいわせると。(笑) まともじゃないので、どこかおかしいんですよ。こういう人を集めていい政治ができるはずがないんだ。ただ体力使って、毎朝演説したから立派だという話じゃないんで、もっとまともなね……。

20年ぐらい前からですかね、役所が政治に対して複数の選択肢を出さなくなった。こういう方法とこういう方法とこういう方法がありますと。こういう方法しかありませんといって、あとは隠してしまうというような感じで、それで通用しちゃった。そういう選択をしていけばいいんですよ。事務次官の人事権だって、役所のことはわからないじゃないかというかもしれないけれども、いまの事務次官に、候補を3人出せといえいいんですよ。それだけでも人事権はこっちのものになる。それで一人一人呼んで、「あんたが事務次官になったとき、局長をだれにするか、名簿つくってこい」と、それで政治の側で検討して、決めていけば、そんなに難しいことじゃない。それを一手に握らせて、お手盛りをやらせるからこういうことになる。知恵はいくらでもありますよ。いまの制度の流れの中でもね。そんなにきちっとした組織をつくって、どうのこうのという話じゃないんだ。

ちょっとしたところで、相当大きく流れは変わってきますよね。ちょっと答えが長過ぎて申しわけありません。

司会 もう一点。小沢さんの協力によっては、大久保利通を超える業績というすごい話をされたんですが、いまのこの局面で、どういう仕事をイメージされているんでしょうか。

田中 やっぱり、政治主導の体制というのは非常に革命的なことで、これは、第一声で鳩山さんがおっしゃっていましたよね。明治維新以来ということを書いて、いまは戦前の体制よりもっとひどいですよ。やっぱり戦前は、ちゃんとした元老という見識があって、見識とはちょっと首かしげるような人もいたかもしれないけれども、きちっと天皇制というのがある意味絶対的だったから、逆に、そんなに戦後の官僚ほどじゃないし、もう一つは、官僚組織の中で、かなり原敬なんかもそうですが、民間からの、例えば新聞を経営したからその後役人になったというような感じの、そういう民間との交流があったよね。風通しよかった。

戦後ですよ。特に、昭和40～50年代以降じゃないですかね。一つは、戦前、戦中、戦後の動乱期を少年時代に送って、やっぱり国の再建のために共通した志を立てた。あんたは政治家に向いているから政治の場へ行け、おれは政治はちょっと苦手だから役人になるよと。同じ日本の再建のために力尽くそうと。おれは、じゃ、言論人になって、いろいろチェックしたり牽制したりするよ。志が同じで、時代が人材を鍛えたのです。それがなくなってしまって、東京の有名私立大学へ行って、東大、行きやすいから行って、その後役所に入って、そういう流れで来た。時代からも鍛えられていない。自分の家庭環境からも鍛えられていない。そういう形で政治家になったり、あれになったりしたって、それはもう、昔の人たちに劣るのは当たり前だというふうに思いますよ。私も含めていつているんですよ。そういうふうに思いますね。

質問 私は政治記者をやっておりませんが、政治の奥の奥のことはよくわかりませんが、いまの自民党、大体70人ぐらい政府に入っておりますね。今度100人入れるとっております。100人ぐらいで政治の内実が変わるとは僕は思えないんですよ。ある大臣が、かつて、「そういう難しいことは、私は答えられませんので、事務方に答えさせます」といつて首になりましたね。あれは正直な大臣だと思うんですね。

今度、大きく変わらなきゃいけないという掛け声はあるけれども、内実を本当に変えていくには、相当な知恵と力量と、あらゆるものが必要だと思うんですよ。アメリカの場合は、大統領がかわって、2カ月とか3カ月余裕があって、それで政策を練っていつて、100日間ぐらいは様子を見ようということですが、日本は、選挙が終わって半月ぐらいでもう新しい内閣ができるんでしょう。準備も何も整うんでしょうか。これは、やり方を根本的に変えなきゃだめだと思うんですが、いかがですか。

政治が将棋を指すべきだ

田中 おっしゃること、よくわかります。後のほうの話からお話ししますと、最近、メディアの側もそういう意味では心の準備ができていると思うんですが、昔は、官邸にテント張って、早くできた内閣ほど立派な内閣だというような変なあれがあったんだけど、いまはとにかく、準備をしっかりとしろという方向に変わっていますよね。私、一番心配しているのはそれで、民間人を起用するといつたって、私は、組閣に非常に深くかかわったのは村山さんのときと細川さんのときなんですけれども、民間人でも、この人にはどうしてもなってもらいたいという人は、忙しいから、そんな突然いつたって引き受けられない。「はい、わかりました」という人は、ろくな人いないですよ。(笑)

それはそうですよね。だって、そういうことは本当に望ましい人をといつ話にならない。民間人に何度も何度も断られましたよね、電話し

て。本当に、この人になっていただければという人に断られた。特に細川さんのときは、そういうことだったですよ。

それから、前のほうの話で、100人の話。これは、このままやったら騒々しくなるだけです。役所側は、応接間がいっぱいになったという感じなんです。お客さんだから。それで、ちょっと利権に聡い人なんかいたら、魚屋に猫放すようなものだというふうに、私は思いますので、イギリスは140人ぐらい入ってくる。それと形だけ真似たって意味ないので、先ほど申しあげたように、人事権の問題なんですよ。

例えば、菅さんは昔から、さきがけ時代から、大使をみんな民間人にしろということをいって、ちょっとどこにずれがあるかという、私は外交官が全部大使になって、結果的にもそれはいいと。ただ、外交官を決めるのは政府が決めればいいんだと。民間人を多くしたといたって、外務省がその人事を握っているからには、やっぱり外務省に対して異論のある人は全然出ないから。だから、将棋にたとえると、将棋をだれが指すかが問題であって、それは王様になった、飛車になったって、おれ、王様だ、飛車になった、おれ角だといったって、動かされるわけですからね。だから、動かすのはだれかというのが一番根本問題です。それを政治主導というんですよ。政治が将棋を指す。

いまは王様である総理でも、財務、外務でも飛車角だとした場合、動かされるんだから、みんな。だから、動かす側があつたら、個人的にみれば優秀な官僚の人たちが多いですから、それがたまたま結果的に全部大使を占めたとしても、それも構わない。

それから、天下りでもそうですよ。いろいろあつせんして自分たちでお手盛りをやるからいけないんであって、なっちゃいけないとはいってない。必要な人材を政治が決めていく。結果的にそうなったというのなら、それは官僚出身者でももちろんいい。だれが決めるか。決めることによって組織的な利益を擁護するという問題が一番いけない。それが一番いけないのであって、100人入っていったから政治主導

になるなんて、そう思えないですよ。

大体、その人たちは個室が必要ですからね。車も必要だし、秘書も必要だし、大変な金がかかっちゃうよね。それで大したことしない。おれ、何したらいいのかなああって、朝から晩までそういう顔しているという人たちが霞ヶ関にふえたらほんとに困るので、これは。そういう公約をしたとしたって、守らなくても文句いわないから、ということで、あんまり守ってもらいたくないですね、こういうことは。本質からそれているから。必要性から出てきた数じゃないでしょう。この数を送り込むぞ、政治家はそれだけ、じゃ政治主導と。必要性からきちっと出てきたものであれば、それでいいんであって、そういう形で僕はもっと実質本位にやってもraitたいというふうに思いますね。

質問 とりあえず民主・社民・国民新の連立政権ということで、やはり外交、安全保障、この問題で民主党と社民党とは憲法改正問題も含めて、かなり溝があります。それがこれからどういうふうな亀裂の可能性があるのか、ないのか。それから、日米関係で、早くも普天間返還に伴う再交渉をしないと、鳩山さんの論文についてのアメリカからの素早い牽制球が出ております。

ですから、長期政権を目指すなら日米関係を大事にする、というようなことも含めまして、この外交・安全保障の問題が非常にこれから鳩山さんにとっては大きな試練になるだろうというふうに思うんですが、この辺についてどのようにお考えなのか、お聞かせください。

オバマと連携し国際協調を

田中 外交・防衛でいうと、焦点になる問題というのは2つほどあると思うんですけども、1つは、日本の戦後外交というのは、日米同盟と国際協調の両立という形でやってきました。これは小泉さんなんかが好きで使ったのですけれども、両立不可能という事態を想定していなかったんですね。だから、日米同盟と国

際協調、国連中心主義といってもいいんですけども、両立でやっていくと。日米同盟そのものが国連憲章に基づいて容認されているというものですから、だから、当然整合性を持っているはずなんですけれども、ところが、イラク戦争の開戦時に、これが両立しなくなった。

ところが、両立しなくなったときの外交原則は全く日本は持たなかった。どちらを選ぶかという。その場面で、これは小泉さんに当時の打ち明け話を、私はいつかしてもらいたいというふうに思っているし、本人にまだそれを確認したことないんですが、心ならずも開戦を支持したと私はみているんですね。

当時の報道、いろんな報道を検証してみました。結局、最終的にフランスもドイツもついてくるんだという外交当局の話信じて、これは当時の新聞に出ていますね。話が違うじゃないかということで、外務省幹部をどなりつけた。で、結局は開戦支持に結果的に回ってしまったんだけど、それは、国連に代表される国際社会の意向、大体の意向、国際協調と日米同盟が二者択一になったときに、小泉さんは日米同盟を選択したというふうにみているんですけども。

ところが、オバマ大統領になって、国際協調主義を掲げているものだから、私は、オバマ大統領になってよくて、鳩山首相でブッシュ大統領とやるには、これは大変だと。オバマさんになったので、非常に荒っぽくいえば、オバマ大統領と連携して国際協調主義を拡大していくという姿勢でいいんだから、これは、国際協調主義を、要するに単独行動しないということであれば、日米同盟、ほんとに大事なものとして維持していけば、それはいいんであって、国連の場で表現される、安保理で表現される国際社会の意志と、アメリカの意志が違った場合にアメリカの意志を選ばなきゃいけないという話ではなくなるわけですからね、オバマ大統領の姿勢からすると。

だから、オバマさんとそれこそ強い連帯のもとに国際協調主義というもので走ればいいんだから、非常にブッシュ大統領が相手の場合と

は違うというふうに思っています。あんまり心配していません。地位協定に関してとか、いろんなさざ波が起きているけれども、あんまり気にすることなくて、大筋でそういうことだから、理解し合えるというふうに思っていますよ。

もう一点は、いま申しあげた問題とも絡むのですが、集団的自衛権の行使、なかんずく集団的自衛権についての憲法解釈の変更というようなことですよね。このことについては、民主党内が足並みが必ずしもそろっているわけではない。しかし、この件は、鳩山、小沢、菅、岡田、足並みがそろっていますよ。集団的自衛権は行使しないと。前段階の話でいえば、国際協調主義でやっていくということについては。

だから、外務省が恒久法をつくるという姿勢をこの何年か示していますけれども、小沢さんの恒久法と全然違うんですね。外務省側は、日米同盟に基づいても武力行使ができるような方向で何とかできないものかという希望を持った形で法制化を進めているような節があるんだけど、小沢さんはもう、国際協調に基づく武力行使は容認する、こういう姿勢。それを法制化していこうということでしょうけれども、これも国民的議論と合意が必要ですよ。私もどっちかという小沢さんにこのことについては考え方は近いんですけども、これは一時、アフガンのことで発言して誤解を呼んだことがあるので、これは国民的議論とか説明とか——あの人、説明が下手だし、それから嫌いだしね。結論から先にいっちゃうから誤解を受けやすいんですけども、私は小沢さんの姿勢は正しいと思う。だけど、これは外交当局の姿勢とは違いますよ。恒久法を出さなきゃいけない、出そうということでは共通しているんだけど。

この問題は、おそらくかなり早い時期に、小沢さんが仕掛けてくると思いますよ。僕はこれも期待して見守っているんですが、そのときに、民主党内でそれに賛同しない人たちが何人かいますね。何人かいるので、ひょっとすると、これは大事な問題だけに参議院選挙までの間に、いろんなすったもんだ、ほかのものと重なって一つの分裂要因になるかもしれない。だか

ら、これはこれで歓迎すべきことですよね、寄り合い所帯的なことがなくなっていくということですから。

司会 ありがとうございます。もう一つご質問あれば……。

自民党は解党するしかない

田中 なかったら、私、もう一つ話し忘れたことがある。自民党のことね。自民党、再生するのかという話ね、いいですか2～3分くらい。

司会 はい。お願いします。

田中 結論から先にいえば、再生しないですね。(笑)

どういうことかということ、政党に必須の条件というのが2つあるんです。すぐれた指導者とすぐれた指導理念ですよ。両方ないんだから。その責任がある人だけ残っちゃったでしょう。かさぶただけ残っちゃった。だから、これを再生するには、解党するという形しかないですね。それから、もっと具体的なことをいうと、支える支持基盤自体が、だんだん妥当性を失ってきているというか、支持基盤自体が脆弱なものになってきています。支持団体といってもいいですよ。支持団体自体が強力なものになってくる。これは一つの社会的産業上の構造変化に伴うもので、これは手の打ちようがない。

それから、もう一つ大事なことは、長年、公明党の世話になってきたものだから、足腰の部分を公明党に担当してもらって、それになれちゃったから、決起大会でひな壇に並ぶ人たちはいっぱいいるんだけど、聴衆になる人が少なくなっちゃっているんですよ。特に、背広を着て、ネクタイしたような聴衆がふえて、作業着を着たり、そういうノーネクタイの人たちが少なくなっていくという、地方においての自民党の支持層。この人たち、例えば建具屋だなんていう人が選対本部長なんかで腕を振るっ

ているところに自民党選挙の強さというのはあったんですね。これは小選挙区になってさらにその傾向が深まっているんですよ。なぜかといったら、一気にその支持団体が集まってきて選対をつくるから、一番大事な、個人支持者が遠くへ行っちゃっているんですよ。外堀の外まで行っちゃった。ところが、昔の保守党の選挙というのは、そういう人こそ、農家の人とか、さっきいった建具屋さん、大工さん、そういう人たちが非常に献身的に働いて、国のためだ、自分たちより国のためだという、地域のためだという気持ちで、そういうすごい人たちがいた。そういう人たちが撤退しちゃって久しいから。だから昔の自民党がもう一回よみがえるということはないから、そういう自民党を一応御破算にしてね、そうになっていくと思いますよ。自民党内に残った人たちの中で、かなりそういう行動を起こす人たちが出てきたときに、いままでの自民党を覆すような形での行動を望みたいし……。

それからもう一つ、民主党の新人議員の中で、特に女性議員には非常に期待できそうな方たちが多いですよ。だから、割にいままでの女性議員というと、これ、どこかで怒られたら困るんだけど、変わった人というよりも、さっきみたいな、異能の人といったほうがいいですよ。そういう人たちが多いような感じがするんで、ごく常識人として、何というか、政治家として立派な仕事ができそうな人たちが非常に多いというように思いますね。

司会 自民党再生の新しい旗は何ですか、何かありますか。

田中 自分で見つけるだね。自分で。(笑)

司会 はい、わかりました。では、以上で終わります。非常に中身の濃い、いい話でした。ありがとうございました。(拍手)

(文責・編集部)